

この世界は……

この世界では、「セックスが推奨されている」。

なんでも、性的なことに潔癖になりすぎた結果、ひどく人口が減って——国力が落ちたらしい。それも、世界的に。

そんなことがあったものだから、その反動で、逆に性的なことがオープンに、そして日常的なものになった。

セックスとは、隠れて行いう夜の秘密ではなく——日の下であけっぴろげに話題に出すものに。

——男は性欲的に、女は淫らに。

そんなセックスが推奨されている——またの名を「貞操観念が終わっている世界」に生まれた前世持ちの男——たつみ異リヨウ。

そんな男が、やむにやまれぬ事情で、同級生に始まり、教師や大企業の社長まで、さまざまなひとと^{セックス}そういうことをする、これは、その多忙な日々の物語である。

とんでも異世界で委員長を乳首責めにする話

異世界に転生した。

ぱっちりと目を開けて最初に見えたのは、真っ白な天井だ。知らない天井かどうかは分からなかった。今世も前世も、家の天井は装飾なしの、なんの変哲もない壁紙だったのだ。

仕事をしなくてはと体を起こそうとして、そこで自分の体が小さくなっていることに気付いた。あれっ!? と手を見てみれば、ふくふくとかわいらしい赤子のおでて。そこで転生したことに気付いた。

当初、転生先は前世と同じ世界なのだと思っていた。見慣れた家電、見慣れた服装、見慣れた町並み。だから、前世と今世は延長線上にある、と

信じてもおかしくないだろう。しかし成長するにつれてそれが間違いだと気づく。

まず違和感を覚えたのはテレビの教育番組だった。

幼児向けだというのに性的なアニメをやっている。もちろん子供向けにオブラートには包まれているが、キスの仕方や性感帯の位置などを当たり前の顔で流している。キスは妙に濃厚に描写されるし、局部までは映されなかったがセックスのシーンも流れた。

……あれ、こういう放送って、もっと厳しく制限されていなかったか？

次に違和感を覚えたのは、街に休憩所が多かったことだ。小さなガラス窓がはめ込まれた、巨大な白い箱をいくつもの小部屋に区切っただけの施設。各室にはシャワー室とベッドが完備されている。料金は一時間三千円ほど。

なんの部屋？ みんなそんなに昼寝が好きなんだろうか？

街中の至る所、それこそ家族連れで賑わう公園にさえ、その白い箱は存在していた。「あれってなあに？」と子供らしい疑問を口にすれば、大人は「あら、おませさんね。もう少し大きくなったら教えてあげる」と微笑んだ。だがまあ、好奇心旺盛な子どもはそこで「大人になるまで待とう」とは考えない。べたべたと腕を絡ませて入っていく男女の後を追って、窓の隙間から中を覗き込んだ。……それで、そこが休憩所という名の、ヤリ部屋だと知った。

どうやらこの世界は、かつて深刻な食糧難に陥った際、人口抑制のために性的コンテンツを厳しく取り締まった結果、想定以上に人口が減り、あわや人類滅亡の危機だったことがあるらしい。そしてその反省をこめて、今度は逆に性的コンテンツの規制を撤廃し、性行為を推奨する社会へと舵

を切ったとか。……急カーブを切りすぎ。

その恩恵（？）により、幼稚園児くらいになるとキスは当たり前。小学生にもなれば触りあいつこをするようになり、中学・高校ともなればまあ本番行為も当然となる。

そうはならんやろ。なっとるやろがい！ というやつである。

まあそういう世界なので、結婚するまでは様々な相手とそういう行為を行う。快楽を追求し、快楽のための道具も充実している。だいたいはふたりだが、場合によっては複数人と同時に交わる。

貞操観念は死んだ。なんなら相手は異性じゃなくてもよかったりする。

産めよ増やせよが根本にあるおかげで、産みすぎた場合は養子に出せる法整備がかなり充実しているのだ。

男男でも女女でも子どもがほしけりや養子を貰え^{もら}ばいい。場合によって

は親しい友人に頼んで子どもを産んでもらうこともできる。

倫理観も死んでいる。

もし俺が、貞操観念と倫理観のしっかりした人間だったら、早々に発狂ぞうぞうしていただろう。

だが幸いなことに、俺はそこらへんがそこそこに緩かった。基本的に生死にかかわらずさえしなれば、その時その時で所属しているコミュニティの空気に合わせていたので。

朝食を済ませ、軽いバッグを肩にかけ家を出る。

高校は、ただ自宅から近いというだけで選んだ所だ。歩き始めて十分も経てば、同じ制服を纏まとった少年少女たちの姿がまばらに見え始めた。

いつものように校門をくぐり、声をかけてくる友人たちに適当な返事を返しながら教室を目指す。

「……あの、^{たつみ}巽くん」

教室内に入ると、すぐに委員長が歩み寄ってきた。どこか落ち着かない様子で指先を動かし、目元をほんのりと赤くしている。委員長は色白なので感情がすぐに顔色に出るのだ。クラスメイトたちは彼を「真面目メガネ」と揶揄^{やゆ}しているが、どデカイ縁の眼鏡の奥をよくよく見れば、かなりきれいな顔立ちをしている。

「ああ、今日だよな。いつもの？ 長さはどれくらいだったけ？」

「……今日。いつもの。時間は……に、二時間で予約した……」

「りょーかい」

ぼん、と肩を叩^{たた}けば、こくこくと頷^{うなず}いて委員長が自分の席に戻っていく。委員長はきちんと男の硬い身体なのだが、仕草がどこかかわいらしい。

その背中を見送っていると、「おはよう、巽！」と隣の席の騒がしい住人

が元気な声を張り上げてきた。苦笑いを浮かべて挨拶を返し、俺のいつもの日常が始まった。

※※※

放課後。部活へ向かう友人たちを見送り、俺は手際よく帰り支度を整える。ちやうど立ち上がるところで、話しかけられた。

「ねえ、巽くん。今日、この後って空いてる？」

「ああ、悪い。先約があるんだ」

「えっ、あ……そっか。残念」

クラスメイトの女子だった。スマホを握りしめ、上目遣いに誘ってきた彼女に対し、申し訳なさそうな顔を作って謝る。

目に見えて肩を落とす彼女に、明日なら空いていると告げると、「本当？じゃあ予約していい？ 一時間」と、一転して華やかな笑みを浮かべてきた。

これでも売れっ子なので、一ヶ月先まで予約は入っているが、明日ならば奇跡的に空いていた。頷くと、彼女は「それじゃあ、すぐ予約するね！」と弾んだ足取りで教室を去っていった。

いつの間にかがらんとした教室に残ったのは、俺と委員長の二人だけだ。カバンを持って準備万端の委員長の肩を抱いた。

「じゃあ、行こっか」

耳元で囁けば、委員長の頬は期待するように朱に染まった。

※※※

この世界では、セックスが推奨されている。そのため、休憩室という名のヤリ部屋がどこにでもある、という話をしたと思う。

どこにでも、ということは当然この学校にもあるわけで。

別棟にある、その施設へ足を踏み入れる。入り口の機械に学生証をかざすと、システムが二人用の空室を検索し、一つの番号が表示された。同時にカードキーが吐き出される。

部屋に入り、カバンを置いてブレザーを脱ぐ。そわそわと視線を彷徨さまよわせる委員長に、俺はスマホの画面を向ける。

「先に、手続きを済ませようか」

「う、うん……！」

互いの端末に浮かび上がるのは、見慣れたアプリの画面。通称、マmatcチ。

正式名称は別にあるが、国が開発した性交管理アプリとして、この呼び名が愛用されている。

国を挙げてセックスが推奨されているとはいえ、身近に相手がいない者や、あるいは「味変」として別の刺激を求める者がいる。そういう時に使われるのがこのマッチだ。生年月日、名前や経歴といった一般的なプロフィールに加え、詳細な性嗜好せいしこうなども記入できる。そこで気になる相手を探すというわけだ。

見つけた相手とチャットで合意に至れば、対面でセックスすることができる。ちなみに、腕に自信のある人間は、時間やプレイ内容ごとに料金表を作り、「商売」することも可能だ。

俺もその一人で、そこそこ売れているから相場よりは高めに設定している。ちなみに同じ学校の場合は割引あり。

そして今日、俺を指名したのは、この「委員長」だった。

俺が差し出した画面のコードを、委員長が読み込む。わずかな沈黙の後、決済完了を告げる電子音が響いた。

「まいどあり」

機嫌よく口角を上げ、プレイの内容を確認する。

普通の客ならば、承諾する前にアプリに入力させるのだが、委員長は例外だ。授業の自習を済ませた後の実践なので、その時々でやりたいことが変わるのだ。今までの実績から無茶振りはしてこないことは分かっているので、許している。

委員長はきよろきよろと所在なげに視線を彷徨わせると、「胸を……かわいがってほしい」と、消え入りそうな声で言った。そして、あまりの羞恥に耐えかねたのか、まなじり 眦に薄らと涙を滲ませ、顔を耳まで真っ赤にして「シ

「ヤワーに行ってくる！」と叫ぶ。

彼は逃げるように、シャワー室へと駆け込んだ。

「自分で脱ぐ？ それとも俺に脱がせてほしい？」

「……た、巽くん、脱がせてほしい」

白い肌を淡く色づかせて委員長が上目遣いにこちらを窺^{うかが}う。かわいらしいその姿に微笑んで、そつとこめかみへ唇を落とすと、彼はびくりと肩を震わせ、さらに頬を赤くした。

出会ったばかりの頃は、おねだりも知らなかった。俺を煩わせないようにと、色気なくさつさと脱ぎ捨てていたのだ。

いつだったか、「誘ってみて」と言った時は、全身を真っ赤にしながらも

たもとと服を脱いでいた。残念ながら、それは『壊滅的に不器用なひと』の姿でしかなく、色気は皆無であつたけれど。

仕方なく、見本として俺が脱いでみせると、頬を染めながらも感心したように頷いていたのを覚えている。

しかし彼は、どれだけ練習しても『時間をかけて着替えている人間』以外のなにものでもなく、それから俺に「脱がせて」と頼むようになった。

横着者だ。もともと俺たちがこういう関係になったのは、彼が『勉強したい』と言ったからなのに。

この世界はセックスを推奨している。かつての世界のように隠す必要はない。むしろ、よほど倒錯した内容でなければ、日常の会話として当たり前前に語られる。

ゆえにこの世界では、頭が良いとか、顔が良いというのと同じように、

セックスが上手いことが一種のステータスとなる。「あの人は頭が良い」と称賛されるのと同様に、「あの人はセックスが上手い」と語られるのだ。

しかし委員長は、頭は悪くないが、ことセックスに関しては不得手だ……というか、端的に言って、下手だった。

本人曰く、快感そのものを感じにくいのだという。女性を相手にしても勃たず、かといって男同士でも気持ちが良いくない。それをどうにかしたいと、彼は俺に相談を持ちかけてきたのだ。

そういうわけで、俺は彼から対価を貰って、教師役をしている。

これまでのことで分かったのは、委員長は「感じにくい」というより力加減が下手だということだった。そして何より、そういう雰囲気を感じずかしがってわざと避けているフシがある。服を脱ぐ時しかり、自分でやる時や、相手に触れる時しかり。

その分析は、すでに本人にも伝えてある。それでもあまり改善しないために、こうやって俺と復習^{ブレイ}をするハメになっていた。

委員長の服をすべて脱がせ、見せつけるように俺も脱いで、互いに下着一枚の姿になる。正直、俺は制服のままでも構わなかったが——なにしろ今回のオーダーは“胸をかわいがって欲しい”なので、汚れる心配があまりない——、万が一ということもありうる。うっかり汚れたら面倒だ。

すでに茹^ゆで上がったように真っ赤になっている委員長を、背後から抱きしめるようにする。そしてそのまま彼を自分の股の間に座らせた。

「自分で触る？ それとも、俺に触ってほしい？」

「じ、自分で……」

恥ずかしがりながらも、委員長は両手を上げて自身の胸に触れた。彼は、いわゆる陥没乳首だ。

一番触れやすく感じやすい部分が隠れているのも、彼自身が「自分は感じにくい」と思ってしまう原因のひとつだろう。委員長は埋もれた乳首の周辺を、もみもみとまたもや色気なく揉む^も。

「家で、自分でも試してみたか？」

「やってみたけど……。異くんみたいにな、うまく……。できなくて」

ぐにぐにと無遠慮に摘んでは離す、を繰り返す。そんな触り方じゃあ、気持ちよくはなれないだろう。

「もっとやさしく」

「う、ん……。っ」

だが今度は、触れているかどうかとも分からないほど弱々^{よわよわ}しい手つきになった。強か弱しかないのか。その中間を目指してほしい。

委員長はいつもこうだ。だがわざとではないことは分かっている。本気

でしているからこそ、怒れない。

「う、うまくできない……っ」

何度か助言を重ねたが、どれもうまくいかなかった。勉強はできるのに、こういうことは本当に苦手らしい。

「……………た、巽くん……………さわって」

瞳に薄らと涙を溜め、上目遣いに見上げてくる半泣きの同級生に、しかたないなと笑う。本音を言えば、こうなると思っていた。何度も繰り返しているこの自習は、いつもこうになる。

委員長顧客の望みはセックスがうまくなりたい、あるいは感じやすくなりた
い、ということだが、結局のところ満足すれば問題ないのだ。

「もうギブアップか？」

「だって……」

からかうように笑うと、彼はつん、と唇を尖^{とが}らせた。教室では凜^{りん}とした美人なのに、ここでは幼く甘えた表情を見せてくる。そのギャップに、少し心がくすぐられる。

片方の胸へと指を伸ばす。

無遠慮にいじられたせいで、少しだけ赤くなっているそこを労わるように、指先でゆっくりと撫^なでた。それだけで、委員長は期待するように体を揺らした。

右側の乳輪をくるくると撫でたり、摘んでみたり。愛撫^{あいぶ}されるどころか、痛めつけられたそこを甘やかしてやる。左側にはあえて触れない。右側だけを可愛がる。

「あっ♡ あ、んっ♡ はあっ……♡」

すり♡ すり♡、すり♡ すり♡、と指の腹で撫でてやれば、彼はたま

らないといった様子で甘い声を上げた。

「お、恥ずかしがり屋が、顔を出してきたな」

「ひんっ♡」

肉に埋もれていた先端が、じわじわと顔を覗かせる。そこをぴんと爪先で弾いてやると、彼は腰をびくりと跳ね上げ、甘く震えた。

「手本は見せたぞ。……ほら、こっちは自分でやってみろ」

右側はすでに屹立^{きつりつ}しているが、左はまだ内に籠もったままだ。

「む、むりい……できないよお……っ」

「無理じゃない。やってみないと、いつまでもできないままだぞ」

すりすりと、右の先端を指の側面でなぞるように刺激してやれば、彼は熱い息をこぼしながら、震える手を自身の左胸に当てた。

そして、俺の動きをなぞるようにして触り始める。彼は記憶力はいいの

だ。力加減が下手なだけで。

「あっ♡ んんっ……♡」

彼は一番はじめよりは気持ちよさそうに――けれど、物足りなそうに身を振よじらせる。

「んうっ♡ ん……っ、はっ♡」

結局、隠れていた先端は半分ほど顔を出したものの、それ以上は顔を見せなかった。

「た、たつみ、くん……っ」

委員長は、潤んだ瞳で熱っぽくおねだりをしてくる。

その様子に苦笑が漏れる。ここで俺がすべてを引き受けるのは簡単だが……。

「委員長、人差し指を立てて」

「え……っ。う、うん。……こう？」

俺は彼の手を上から握って、かわりに動かす。この時間の名目上の目的は、あくまで「委員長のセックスが上達すること」。ならば、手取り足取り俺がすべてやってあげる、というのはよくないだろう。

右の胸をかわいがりながら、委員長の手を取って左のそれにも刺激を与える。

くすぐるように撫でたり、つんつんと突いたり。委員長は物足りなさそうだが、それでも先ほど自分でやっていたときよりも気持ちよさそうだった。

丹念に繰り返していくと、やがて左の先端もむくむくと勃ち上がった。

「……できたな」

「っ、あ……う、んっ♡」

乱れた息に肩を揺らしながら、委員長はこくこくと頷いた。

俺は彼の手をぱつと離す。驚きに目を見開いた彼の^{みみたぶ}耳朵を食むようにして、低く囁きかけた。

「それじゃあ、次は俺の真似をして」

「……っ！」

指先で、熱を持った乳輪をゆっくりと擦りあげる。ぴくぴくと反応しながら、委員長もおぼつかない手つきで自身の指を動かし始めた。

「ん、はあっ♡」

「ちよつと強すぎ。もっとやさしく」

「ん、ん♡」

次は、上下に。皮膚の薄い部分を、焦らすように撫でさする。

「ん♡ あっ♡」

「そうそう、その力加減。忘れるなよ」

尖った先端を軽くノックし、指先で摘んでから僅かにひねり上げる。

「んあ♡ あっ、あっ♡ ああっ♡」

委員長の手つきを時に褒め、時にたしなめてやる。拙いながらも、彼は自分の手で感じられるようになってきていた。

「はは、乳首だけじゃなくて、チンコもたってるな」

「あっ♡ そんな、いわないで♡ はずかしいっ♡」

「恥ずかしがることない。……きもちいいんだろ？」

「あ、う♡ うん♡ きもちいい♡ きもちいい♡」

委員長の昂りたかぶは天を突くように立ち上がり、よだれを垂らしていた。けれど、胸への刺激だけではもどかしいのか、腰がゆらゆらと揺れている。

俺はしばしの逡巡しゆんそんの後、委員長の脚の上に自身の脚を乗せた。これ以上

腰が動かないようにと、隙間なく密着する。

恥ずかしそうに、けれど恨めしそうな瞳で見上げてくる委員長を宥める^{なだ}ように、言う。「今は胸で感じる練習だろ。腰振りの練習は、また今度」彼は目を赤く染め、涙目になった。そのくせ、瞳の奥は次を思っ^て期待に輝いている。……次は腰振りか。どうやって教えようか。

別のことに思考を割きながらも、俺の指は的確に彼の弱点をなぶつていた。

「あっ♡！ あっ♡！ あっ♡！」

「こーら。手が止まってる」

「だってえ♡ あ♡ あああっ♡ ひいん♡♡♡♡」

委員長の声が次第に高くなる。脚が固定されたことで、腰を振って快楽を逃すことができなくなった。そのせいで胸の刺激だけに集中せざるを得

なくなったのだ。のけぞるようにして悶^{もだ}えるが、俺が背後にいるせいで、ただ触りやすくなったただけだった。

「かりかりダメッ♡ ピンピンもムリッ♡ あっ、ひっぱらないで……♡♡♡」

「委員長、手。動いてないぞ？」

「あ、あ、あ、ごめっ♡ でもっ、もうムリだよぉ♡」

「はは、ムリ、か」

感じにくい、なんて言葉が嘘^{うそ}のように、彼は乱れきっていた。飲み込みきれなかった唾液が顎^{あご}を伝って鎖骨を濡^ぬらし、真っ赤な顔で天井を仰いでいる。

隆起した乳首の下を、指先で弾くように掻^かいた。

「あっ♡！ あっ♡！」

さらに先端を、小刻みにトントンと叩く。

「ひっ♡！ あっ♡！ あっ♡！」

トドメを刺すように、芯^{しん}までぐーっと押し込んでやる。

「あーっ♡！ あーっ♡！」

強い快楽から逃げるように、委員長は上半身をぐねぐねと動かして悶えた。

腰を浮かせようと力が入るが、俺の脚に拘束されているせいでほとんど動かせていない。逃げ場を失い蓄積されていく快楽が、彼の内側を焦がしていくのが手にとるように分かった。

真っ赤な顔で、歯を食いしばりながら耐えている。掛けていた眼鏡が変なふうにズレているけれど、それを直す余裕すらないようだった。

かつての理知的な面影はもはや、ない。そこにあるのは、蕩^{とろ}けた顔の、

快樂の奴隸の姿だ。

難しい数式や論理を考える頭なんてもうなくなつて。ただひたすらに与えられる快樂に悶えて、啼ないて、悦んでいる。

「ひい いっ♡ アッ、ダメッ♡ ダメッ♡ あ、あ、あッ♡♡♡」

びくびくと震えながら、俺の指使いにならつて彼は音を奏でる。ちらりと時計に目をやった。もうそろそろ、いいだろう。

激しく、けれどイかなない程度のぎりぎりを責めてから、ぱっと手を離す。なぜ？ と当惑の色を浮かべて見上げてくる彼に、意地悪く微笑んでやる。見せつけるようにゆっくりと、指先で彼の先端をやわく挟み込んだ。

「……ッ♡！」

——そうして。

ぎゅう、と搾しぼりあげる。

「あ、あ、あ、あ、ツ~~~~~~~~♡♡♡」

委員長は目を見開いて大きくのけぞった。ぴゅう、と白濁が、弧を描いて飛んで白い腹を汚す。がくがくと全身を震わせながら、とても気持ちよさそうに、彼はイッた。

——一度目の、終わり。

とはいえ、まだ時間はある。

……まだまだ、終わりにするには早かった。

※※※

「委員長、一度イったし、感覚は掴めたよな？」

はあはあと、肩で激しく息を切らす僕に、巽くんは何事もなかったかの

続きは本編で！